鮒の湖

ＮＰＯ法人
長浜観光ＶＧ協会
電話（６５）０３７０

発行責任者
辻川　原藏
編集責任者
木村　富久子

行楽シーズンの秋の到来となりました。観音の里ふるさとまつりを始め、観音の里を巡る旅、彩る紅葉を味わう旅、長浜市の楽市楽座や着物大園遊会など、湖北長浜を舞台に繰り広げられる行楽行事が目白押しです。

十月十四日には長浜きもの大園遊会が黒壁周辺で繰り広げられます。振袖の女性約千人が長浜の街なかをそぞろ歩きます。街中が一番華やぐ日です。

翌十五日は、第三十三回観音の里ふるさとまつりです。毎年この祭りには多数のガイドの皆さんに出動していただいております。今年は観音研修も済ませましたので存分にガイド活動をお願いします。

また、「**紅葉の季節を！**」迎え観光に一段と花が咲く頃となってまいりました。

いつでも出動のできるよう「ＮＰＯ法人　長浜観光ボランタリーガイド協会員」としての準備をお願いいたします。

今年の観音祭りには、巡回バス４コースのガイド依頼が来ています。これには午前・午後に分かれてそれぞれ４人ずつ、計８人のガイドが必要です。

また、ＪＴＢからも大型バスのガイド依頼があり、ガイド２人がバスに乗車して、コースを巡るのですが、　これはお客様と一体となって一日中応対しなければならないので結構疲れます。

このような各種活動が続きますので頑張りましょう。

ＮＰＯ法について

ＮＰＯ法人も税金を納めるの？

法人になると、一定の納税の義務が課せられます。ここでは一部のみ簡単に説明します。

国税である法人税については、ＮＰＯ法人は原則非課税となっていますが、法人税法に規定された収益事業を行う場合には、その収益事業からの所得に対して、企業と同じ税率で法人税を納めなければなりません。

地方税については、この収益事業からの所得に対して課税される他、収益事業の有無や所得の有無にかかわらず住民税の均等割り（都道府県と市町村を合わせて　七万円／年）が課せられます。しかし多くの自治体では、法人税法上の収益事業を行わないなどの一定の条件のもとに、これを免除する規定を定めています。

税制上の手続きは、国税なら税務署に、地方税なら都道府県税事務所に必要書類を提出して行います。

業務改革推進委員会

このたび協会の改革により業務改善推進委員が発足いたしました。

この委員会の設置期間は平成三〇年の総会までで、主な業務は協会の各種業務の不備に関して改善を検討するもので、理事長が指示を下した件に関し最善策を検討して理事長に答申するのが業務です。

現在、磯田委員長他七人のスタッフで運営されています。

皆様も協会の業務に関して、改善要望があれば遠慮なく理事長に話していただければ、理事長から業務改革推進委員会に検討指示が下されるので、日頃思う事を遠慮なく話し、皆で活力ある協会に育てましょう。

花火の後の清掃活動

長浜観光ＶＧ協会には環境の保全を図る活動を一つの事業として定めて年間いくつかの環境保全事業をボランティア活動として実施しています。今回の活動は長浜市の花火の後の清掃活動で、参加者一〇人で寂しく実施しました。

花火大会翌日の清掃に参加しました

橋本　常憲

８月５日早朝、花火大会翌日の清掃に参加しました。私にとっては昨年に続いて２回目の参加です。

集合場所である臨湖前に着くと、すでに我がＶＧ協会の先輩方が談笑しておられました。私も話の輪に入れてもらい、軍手、ゴミばさみ、ゴミ袋の３点セットを手に、清掃開始の時間になるのを待っていました。臨湖前の駐車場には西中生徒がクラス毎に整列していて、その周りに大人の参加者が人混みをつくっています。挨拶や諸注意などの短い開始行事が終わり、私たちＶＧ協会の一団もいざ清掃活動に出発です。

今年は臨湖横から湖岸道路に出て、そこから歩道を南に進むコースでした。昨年は臨湖から長浜城へ向かうコースだったのですが、ゴミはほとんど無く、グループの後ろの方の人は付いて行くだけという感じでした。それに比べて、今年のコースはゴミ拾いのまさに「王道コース」で、歩道にも適当にゴミがあるのですが、歩道から湖への斜面を降りると、護岸ブロックの間や水辺に古いゴミもあちらこちらに散見されて、来た甲斐があるゴミ拾いになりました。私は、割と早く水際に降りたため、ＶＧ協会グループからは遅れてしまい、後ろから来た西中の生徒６人と先生１人のグループと一緒に行動する形になってしまいました。

湖岸道路の歩道を進み、宮本組ビルの向かい辺りまで来たとき、小学生連れのお母さんが「この子のメガネを探しているのですが、落ちていませんでしたか？」と我々に尋ねて来られました。「昨夜無くされたのですか？」、「何色ですか？」などと聞いている内に、横にいた西中の先生が「メガネってこれですか？」とすぐにメガネを見つけられて、親子さんに喜ばれたと言うこともありました。

メガネ発見を機に、すでにゴミ袋も一杯になっていたので、出発地点に戻ることにしました。

ゴミ拾いとメガネ発見という２つの善いことをしたというさわやかな気持ちで、道に落ちているゴミを拾いながら家に帰りました。

新人です宜しく

プロフィール

住所　加納町
氏名　高橋　正
年齢　六十五歳
趣味　スポーツ

この度、ＮＰＯ法人長浜観光ボランタリーガイド協会に入会させていただきました「高橋　正」です。

スポーツが好きで体力作りに頑張っておりますので、山歩きなどのガイドがあれば頑張ってやってみたいと思います。

長浜市で生まれ育っておりますので、長浜のことなら大抵わかると思いますが、知らないことも多々あると思います。

これからしっかり勉強して頑張ってみたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

このコーナーでは、日頃、協会事業の運営のためにＪＲハイキング事業を企画立案し、さらには下見や見学先の根回しまで行っているＪＲハイキングチームの奮闘記と、協会員の知識の高揚を図るためいろんな研修をしてくれる研修部の研修実態を取り上げてみました。

ＪＲ奮闘記
田圃アートを巡る

藤居　きみ子

九月一〇日日曜日晴天に恵まれこの上もないＪＲハイキング日よりであった。

午前一〇時ＪＲ虎姫駅で集合。予約者二二名のところ四名のドタキャンで一八名のお客を引率しての「田圃アート巡り」である。

幸いスタッフ二名が参加していただいたので、リーダーサブリーダー二名を入れて二二名の団体行動となった。

当初の目的地「玉泉寺」までの間の観光箇所を説明しつつ玉泉寺に到着、見学後同寺の住職の法話を拝聴した。

ありがたい法話が予想以上に長くなり、予定変更、「時遊館」に向かい、少し早めの昼食を取った。

午後は、本日のメインであります田圃アートを遠望しました。。

浅井三代五〇年にとどめを刺した織田信長が、小谷の城を攻めるための陣とした「虎御前山」の織田軍勢の各陣跡を説明しながらついに到着した。

展望台から見る角大師や、曳山三番叟等の「田圃アート」はまさに芸術、素晴らしいものです。歩いた疲れもこの風景がすがすがしくさせてくれました。

あとは河毛駅までのハイキング、「あと少し」と皆を励まし元気に河毛駅到着！　今日も無事に終わった安ど感が全身にしみてくる。皆様ご苦労様でした。

街なか研修

9月2日土曜日、街なか研修が研修部の事業として行われました。参加人員二〇人、「もっと参加してよ！」と叫びたいのですが・・・・・とにかく参加者数人で開催されたのである。

はじめ曳山博物館に行き館内の展示物、知善院の至宝をじっくり見学した。

長浜曳山祭りを生み出した美術や文化の中で知善院と関わりの深い絵画や彫刻など、曳山の絵画や彫刻を施した山縣岐鳳作「長浜曳山祭鳳凰山図」早瀬守次作「臥牛像」などは見る価値のある作品であった。

また曳山の建造と言えば大工の藤岡家一門の初代藤岡甚兵衛が名高く知善院の観音堂を建立した関わりがある。

次に訪れたのは長浜伝統産業館です。

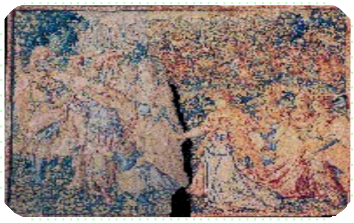
ここは長浜の特産物である「浜ちりめん」や「ビロード」を展示してあります。

私たちが子供の頃、長浜市内のいたるところで「ちりめんやビロード」を織る織機の音がしていたのを思い出し懐かしく感じました。

長浜伝統産業館を出て「えきまちテラス長浜」に向かいました。

ここは、長浜市民の憩いの場所としてまた、長浜の観光を狙って今年開館した建物でまだ新しく誰もがまだ把握仕切れていない場所でしたが、今日の研修で自信が付きました。それともう一つ今日の研修で勉強になったのが屋上からの景色でした。屋上からは長浜市内を一望でき、観光客を案内する新しいコースとなります。

（本文は永田太一さんのインタビューにより作成しました。）



徳川家への献上品が見送幕に

前号まで３回に分けて曳山祭の「外題」と「しゃぎり」について橋本氏が執筆されました。これらは曳山祭のソフトに相当する部分ですから、今回はハードの面に触れたいと思います。

「動く美術館」と言われる曳山は、その優美な形、豪華で緻密な飾り金具と懸装品（見送幕、胴幕）などの調和に由来します。本稿ではその見送幕の由来の一部について述べます。

十二の曳山のうち「猩々丸」以外は、背面を飾る「見送幕」があります。この見送幕の中には中国（明国）や西欧で織られ、江戸時代に日本（長崎）に入って来た物があります。その代表的な物が、「翁山」と「鳳凰山」の見送幕でいずれも重要文化財に指定されていることは、ご存知の通りです。この見送幕の産地や長浜に入って来た経緯などが近年判ってきました。

昭和四一年に京都祇園祭「鯉山」の見送幕修理の時、周りの布の下から「ＢＢ」の文字が見つかり、これは一五世紀頃のブラバント王国（現ベルギー）のブリュッセルで織られたタペストリーと判りました。

ベルギー王立美術歴史博物館のタペストリーの権威者ギー・デルマルセル氏によれば、一六〇〇年から一六二〇年頃の作で、図柄の構成より、職人ニカシウス・アエルツによる「トロイア戦争物語」を題材に五枚連作として作られた物で、「一枚のみで売られることはない」との見解でした。その後の調査で残る四枚は「祇園祭鶏鉾」「大津祭月宮殿山」「増上寺（焼失）」「金沢」に在る（在った）ことが判りました。また、「鶏鉾」の物は二つに切られその片方が「鳳凰山」の見送幕であることは周知の通りです。

増上寺では、徳川家康の念持仏（黒本尊阿弥陀如来）が祀られているお厨子の後壁に、タペストリーが飾られていた写真が残っており、この写真に「鯉山」と同じ人物や、縁飾りの図柄などが写っており、一連の物と確認されました。徳川家にこのタペストリーが在ったことから、江戸時代、日本との交易を認められていたオランダ商人が、隣国ベルギーで織られた五枚のタペストリーを徳川家に献上したと考えられます。その背景には、世界の３分の１の銀生産国日本との交易を継続するため、高価なタペストリーなどを献上したという記録がオランダに残っています。その他にイエズス会宣教師からの献上や、遣欧使節団の支倉常長が持帰った物などの説もありますが、いずれも今から４００年程前に南蛮貿易の船で長崎に運ばれ、二代将軍秀忠に献上されたと考えられています。

徳川家に献上されたタペストリーが再び歴史の表舞台に現れたのは、文化四年(1807)三井本店（ほんだな）（三井財閥の祖）から大津月宮殿山に百五十両前後で売られた証文があります。また、文化十四年(1817)伊藤御店（名古屋の呉服商で松坂屋の祖）勘兵衛が京都室町の巻物問屋（絹反物等の問屋）から買い、藤倉屋十兵衛を経て長浜魚屋町の鳳凰山が二百両で購入した証文があります。

三井家や伊藤家は江戸時代後期の豪商で、前者は紀州徳川家、後者は尾張徳川家に多額の貸金や献金があった記録があります。この献金などへの見返りとして徳川家に在ったタペストリーが両商人に渡ったのではないかと考えられます。

翁山の見送幕はベルギーのオードナルドで織られたタペストリーですが、図柄は「トルコとペルシャの講和の様子」と「旧約聖書のダビデ王物語」の二説があります。文化年間に加賀の豪商銭屋五兵衛が売りに来たとの説と、山組内の薬屋吉兵衛が北陸で買って来たとも伝えられています。一枚のタペストリーの主部からとった物（重文）と、残りの部分をつなぎ合わせて作った物（市指定）の二枚が有り、出番の時は一八屋の辻で東向いたときに後者から前者に懸け替えることが古来より慣例となっています。

（馬場智章　記）

（参考資料「ＮＨＫ放送番組」「曳山博物館企画展資料」「曳山のまち」（観光協会）「翁山パンフレット」）